

状態動詞について¹

これまでの経過

§1 品詞分類の歴史に徴してみれば明らかなように、品詞を形式的な立場から、あるいは意義の面から分類しようとする試みが古来さまざまに行われて来たが、その何れについてみても、完全には律し切れないものが絶えずつき纏って離れることがなかった。

ここから品詞の分類に関して数多くの提言が為されて来たのも、夙に周知の事実である。

このような事情に鑑み、品詞の相違は、これが指示する対象若しくは対象の性質における相違に基づくのではなく、むしろ一定の意義を認識し、あるいは知覚する際の、認識の仕方における範疇的相違の言語的レベルへの反映に外ならぬのではないかと考えた。

次いで動詞の意義特性については、発話の内容をなす状況を構成する一定の要素(状況の変化の担い手)が、一定の時間のあいだに変化したことを感知し、変化した要素以外の条件をも考慮しつつ、この変化を様式化したものであると仮定した(cf. 1, 2)。

これに基づいて次のような自動詞と他動詞の区別を行った。図式的に示すと基本的な状況の変化の担い手を X 、副次的な状況の変化の担い手を Y 、 X 、 Y の状態をそれぞれ S_X 、 S_Y とし、その変化を dS_X 、 dS_Y 、またそれ以外の条件の集合を K として、

$$V(\text{itr.}) : [dS_X, K]$$

$$V(\text{tr.}) : [dS_X, dS_Y, K](\text{cf. 1})$$

このような規定の持つ意味は、まず動詞の有する意義は、一定の相互に異質なものから成っているということであり、第二には *agens patients* のような概念が使用されていないことである。また少なくとも上述のような場合、構文に関する情報が動詞の意義の中にすでに組み込まれているということになる。

§2 以上のような考え方に基き、まず「副次的」な状況の変化の担い手を表示すべき対格について考察を行ったが、その過程の中で、それ自身状況の変化の担い手ではないにも拘らず、それなしには当該動詞の意義が成立しないような対格の存在することが判明した。「橋を渡る」「角を曲がる」の類である(cf. 1)。これを準他動詞 *quasi-transitiva* とすれば、その意義は $V(\text{qtr.}) : [dS_X, S_Y, K]$ で表される。この種の動詞に関しては、その有する意義の中間的性格に起因する動揺が看取される。これを所謂「近い対象」と「遠い対象」について考察したのが文献2に挙げた論文である。

¹『古代ロシア研究』第12号 1978年 57-62頁。

§3 更に古代ロシア語にはギリシャ語やラテン語におけると同じように、所謂第二対格をとる動詞が存在する。英語でいうところの「目的格補語」である。これについて考察した結果、これら第二対格をとる動詞を英文法に倣って「不完全動詞」*verba incompleta* といふとすれば、他動詞の場合、類概念 Q の表示に加えて $(S_Y \rightarrow Q)$ なる条件が K の中に組み込まれていると考えない訳にはいかないと思うに至った。すなわち

$$V(\text{tr. incom.}) : [dS_X, dS_Y, Q, (S_Y \rightarrow Q) \cup K]$$

(本来ならば K は条件の集合であり、また $(S_Y \rightarrow Q)$ はその要素であるから $(S_Y \rightarrow Q) \in K$ のように表示すべきであろうが、表記の便を考えて敢て上記のようにしてある)。

準他動詞の場合には、 S_Y は変化の担い手ではないから、条件としては $(S_Y = Q)$ 以外にはない。すなわち

$$V(\text{qtr. incom.}) : [dS_X, S_Y, Q, (S_Y = Q) \cup K]$$

ここから例えば *verba fiendi* のような不完全自動詞の場合には、類推によって次のようになると予想される。すなわち

$$V(\text{itr. incom.}) : [dS_X, P, (S_X \rightarrow P) \cup K]$$

しかしこの種の動詞については未だ単なる言及にとどまっており、今後別個の考察の対象となり得るかも知れない(cf. 3)。

何れにせよこのように「不完全動詞」を考えることによって、§1に挙げたものは、「完全動詞」に局限されることになる。従って正確には $V(\text{itr. com.})$ 、 $V(\text{qtr. com.})$ 、 $V(\text{tr. com.})$ のように表記しなければならないであろう。

§4 これまでは所謂状態動詞と行為動詞とを区別せず、状態動詞の場合には着目する対象の状態の変化が、一定時間のあいだに生じないことが確認されることで足りる、と考えていた。状態の不変化も広義の変化のうちに含まれていると考えていたのである。

ところが不完全準他動詞が前節で述べたように $(S_Y \rightarrow Q)$ となることができず、 $(S_Y = Q)$ でなければならないことと関連して、不完全自動詞の場合にも、もしこれが状態をあらわすものであるならば、 $(S_X \rightarrow P)$ という条件は不可能であり、 $(S_X = P)$ の場合しか有り得ないことに気づいた。また存在文と非存在文を扱う中で、存在動詞が連辞に転化する過程について考えたが(cf. 4)、その際にも状態動詞を別個に扱う必要を感じた。この点について考えてみようとするのが、この小論の趣旨である。

本 論

§5 まず用語を明確にしておく必要がある。動詞のあらわすものを「行為」とし、その下位概念として「状態」と「動作」とを置く。したがって従来行為動詞といわれて来たものは、「動作動詞」ということになる。

ところで状態動詞といえば直ちに自動詞を連想するが、状態動詞に属するのが必しも自動詞ばかりであるとは限らない。

状態動詞でありかつ他動詞でもあるものとしては、たとえば *имѣти*, *държати*, *хранити* などがある。自動詞の場合には *быти*, *сущь ствовати* などの存在動詞の外、たとえば *стояти*, *сидѣти* などが直ちに挙げられよう。

これらを § 1 で述べた表記であらわすと次のようなことになるであろう。

$$*V(\text{itr. stat.}) : [S_X, K]$$

$$*V(\text{tr. stat.}) : [S_X, S_Y, K]$$

この表記から直ちに判明するのは、他動詞とされているものが dS_Y でなく S_Y であること、換言すれば「補助的な対象」の状態の変化がないこと、によって、実は準他動詞として扱われるべきものであると考えられることである。§ 4 に述べた準他動詞と、状態をあらわす自動詞との対応は、これと関連するものである。従って状態動詞の場合、正確には自動詞と準他動詞しか存在しないことになる(状態動詞であってかつ他動詞と考えられるものについては、別に述べる)(cf. 補足)。

上述の表記の不備は、これだけに留まらない。

少なくとも基本的な変化の担い手が存在しているならば、即ち少なくとも dS_X であるならば、その中に時間の経過は含意されているとみてもよい。しかし上述の場合には状態の「変化」の担い手は存在しないから、これが「行為」として観念される為には、時間の観念を明示的な形で示す必要があるだろう。これは恐らく条件の集合 K の中に「隠され」ているに違いない。このような考慮から自動詞の場合には次のような表示の仕方を考えても差し支えはないと思われる。すなわち、状態に時点の表示を導入し、 t 時点における X の状態を S_{X_t} とすれば、

$$V(\text{itr. stat.}) : [S_X, (S_{X_{t_0}} = S_{X_{t_1}}) \cup K]$$

また他動詞の場合、着目する対象 X の状態と対象 Y の状態の関係が t_0 の時点と時点 t_1 とにおいて同一であることを要するから、一般に X と Y との関係を $R(X, Y)$ で表すことにすれば、これは次のようなものとなる。即ち

$$V(\text{qtr. stat.}) : [S_X, S_Y, (R(S_{X_{t_0}}, S_{Y_{t_0}}) = R(S_{X_{t_1}}, S_{Y_{t_1}})) \cup K]$$

§6 このように時点表示を導入した場合、 $\Delta t = t_1 - t_0$ は一定の状況の変化を「様式化」して、これを一定の「行為」とであると認定するのに要する時間であると考えられる。これは語彙のレベルにおける動詞の意義とアスペクトとの関係に重要な意味をもつと予想される。またこの Δt は、動詞の意義に「事件」、「過程」、「状態」のような「行為の質」

という概念を導入する際の、基本的な特徴となると考えられるが、これらの問題についての統一的体系的な取扱いについては、稿を改めるより外はない。

§7 印欧語においては状態をあらわす動詞を構成する際の代表的な接尾辞として、周知のように **-ē* が存在していた。たとえばラテン語の *sedēre*, *habēre* あるいは古高地ドイツ語の *habēn* ギリシヤ語の *ἐχῶ* の完了形 *ἐσχηκα* などこれに属している。

母音度は本来零階梯であつたと考えられている。たとえば **bheudh-* > *блуксти*, **bhudh-i-* > *будити* (causativa) に対する **bhudh-ē-* > *бѣдѣти* **m-* > *яти* に対する **^om-* > *имѣти* の如くである。

しかしその他の階梯をとるものもまた存在した。たとえば *вѣдѣти* は **woid-ē-* に来源を有すると考えられ、従って母音度は O 階梯である。これは **weid-* (cf. gr. *εἶδω* > *видѣти*) に対する完了形 **woid-* (cf. gr. *οἶδα*) から、これに接尾辞 **-ē-* を附加することによって状態動詞に作り変えたものと解される。また名詞の母音度は本来は O 階梯であつたから、これに接尾辞 **-ē* が附加されて成ったいわゆる *denominativa* も当然この母音度をもっていた。

§8 スラヴ語ではこの種の動詞はアオリスト・不定法語幹において *-ē(ѣ)* 現在語幹では **-i-* の接尾辞をとって、状態動詞をあらわす一つの語彙的カテゴリーを作っている。

この *ē* は第一次口蓋化によって生じた上顎音の後では *a*、語頭あるいは母音のあとでは *ja* となった。たとえば **legh-ē-* > *лежати*, **sta-ē-* > *стояти* などこれに属している。

ところでこの構成をもっている動詞についてみれば、上述の *denominativa* を別にして少くとも二つの系列が存在しているように思われる。すなわち狭義の状態動詞と、もっと広義の「状態」をあらわすものである。

狭義のものとして、たとえば次のようなものがある。まず自動詞としては、*стояти*, *лежати*, *лѣпѣти*, *мѣнѣти*, *сложати*, *скърбѣти* *смърдѣти*, *търпѣти*, *глядѣти*, *стыдѣтися*, *видѣти*, *вѣдѣти*, *сѣдѣти*, *болѣти*, *боятися* etc.

他動詞は数において限られている。たとえば、*имѣти*, *дръжати*, *хотѣти* (+ genit.) などがこれに属する。

§9 これに対して **въртѣти*, *кыпѣти*, *кысѣти*, *горѣти*, *полѣти* (пылати), *шумѣти*, *кричати*, *скрипѣти* のような、動詞も、同じ構成様式を有している。

これらの動詞の有する意義的特徴としては、着目する対象および場合によっては副次的な対象が一定時間に変化を蒙る点で、さきに挙げた狭義の状態とは異っているが、他方この変化がその一定時間内において幾度も繰返され（更に端的に言うならば振動し）、一定の定常状態を示していることである。

たとえば上述の **въртѣти* 「まわす」のばあい、着目する基本的な対象も、対格によつ

てあらわされる「まわされる」対象も、共に変化の担い手となつてはいるが、「まわしている」という点では、一定の定常状態を示すのである。この種の「状態動詞」を仮に「相対的定常状態動詞」*stativa cum relativa constantia* 乃至は「非本来の状態動詞」*stativa non per se* とし、本来のものを「絶対的定常状態動詞」*stativa cum absoluta constantia* または「本来の状態動詞」*stativa propria* と称したい。

§10 さきに挙げた *кысѣти* 「発酵する」、*шумѣти* 「ざわめく」などは、過程と考えることもでき、その意味でこれは、状態から過程への遷移的な位置を占めるものであるということができよう。§6 において触れた「行為」の質という概念が、截然と相互に区別されるものでないことも、明らかである。やはり言語の現象はすべて一の continuum であると観じなければならない。

**pr̥s-ē-tēi* 「撒かれる」 > *пыршѣти* 「雨降る」(cf. *cz. prší* 「雨降る」) など、これに属するものと考えられる。

更にこのタイプに属するものとしては、印欧語の接尾辞 *-sk- に *-ē- を附加して成った **-skētēi* > -штати による構成にかかるものがある。たとえば *блыштати ся* 「稲妻が光る」、*лыштати* 「輝く」、*пицати* 「ピーピー鳴く」、*трещать* 「パチパチ音をたてる」などである。

これを多少形式的な言い方で、先に導入した時点表示と関係づけて述べるとすれば、次のようなものになると思われる。

即ち「行為の認定」に要する時間 $\Delta t = t_1 - t_0$ において、区間 $[t_0, t_1]$ に属する時点の系列 $t_0 = t'_1, t'_2, t'_3 \dots t'_{n-1}, t'_n = t_1$ が存在し、 $S_{X_{t'_1}} = S_{X_{t'_2}} = \dots = S_{X_{t'_{n-1}}} = S_{X_{t'_n}}$ もしくは $S_{Y_{t'_1}} = S_{Y_{t'_2}} = \dots = S_{Y_{t'_{n-1}}} = S_{Y_{t'_n}}$ となるような S_X または S_Y の連続的あるいは discrete な変化がみとめられ、かつ S_X と S_Y の関係が各時点で同じであればあい、この行為を「相対的定常性をもった状態」と見做すのである。

これをそのまま表記することは煩雑にすぎるから、新しい表記法を導入して $Rep.(dS_X)$ 、あるいは $Rep.(R(dS_X, dS_Y))$ とあらわすことにすれば²、この種の動詞の意義構造は、次のようにあらわすことができよう。

$$V(\text{itr. stat. nps}) : [dS_X, (Rep.(dS_X)) \cup K]$$

$$V(\text{tr. stat. nps}) : [dS_X, dS_Y, (Rep.(R(dS_X, dS_Y))) \cup K]$$

§11 このようにしてみれば、相対的定常性をもった状態をあらわすものは、この構成にかかる動詞に限られている訳ではないことに気づく。例えば *вълновати* 「波立つ」、*波打つ* である。このようにしていわゆる多回体接尾辞をもつものもこれに属せしめられるべきものと考えられて来る。

² $R(x, y)$ または ${}_x R_y$ は、 x と y のあいだに、ある関係 R が存在していることを表す。

多回体接尾辞による動詞には、このように一個の対象による行為の繰返しの外に、たとえば多くの対象の一回的な行為をまとめて表現する機能なども有しているが、少なくとも前者の場合には、「行為の認定」のためにはかなりの時間が必要となろう。

それがどれ位のものであるかについては、これによってあらわされる行為を構成する一回的な「行為」の個別性の強弱によって、おのずから異なると予想される(これは名詞において単数が複数を経てやがて単数に回帰する道程の長短と酷似していると考えられる(詳しくは文献5参照)。

何れにもせよ動詞の場合、この時間の長短が、語彙のレベルにおける「体」の範疇と深く関わっていると考えられる。

§12 これに関連して触れておきたいのは、いわゆる定動詞と不定動詞についてである。

詳細については別に稿を改めて論ずる必要があるが、ここでは主として「行為の認定の時間」の観点に限ることとする。

文法書を繙けば通常定動詞は「一定方向の運動」をあらわすのに対して、不定動詞は「不定方向の運動」を示すとされる。しかし一考すれば直ちに明らかになるように、「同時に不定方向に行われる運動」などは存在しない。一度に多方面へ飛行する飛行機がもし仮に存在していたとするならば、いかなるミサイルといえどもこれを撃墜することはむづかしいであろう。事実はそうではない。一定方向に飛ぶものが、やがて方向を変え、更にまた方向を変えするという運動形態をとることが確認されてはじめて「不定方向の運動」なる概念の成立をみるのである。従って不定動詞のばあい、定動詞におけるより遙かに大きな「行為の認定の時間」が必要とされると予想される。従ってまた不定動詞の方が一般に概念の抽象度が高いといえることができる。Ребёнок ходит. のように、不定動詞が「歩く能力」をあらわすというのも、このような概念の抽象度と無関係ではあるまい。アカデミーの文法(文献6)は、このような配慮の上であろうか、定動詞と不定動詞について、次のような規定を与えている。

Глаголы кратного подвида обозначают действие, совершающееся не в одном направлении или не за один прием, не в одно время. Напротив, глаголы некротного подвида обозначают действие, протекающее в одном направлении, не прерывно в определенный момент. (I, p. 458.) (cf. 補足)

他方これらの不定動詞と定動詞との関係は § 10 に述べた意義構造とは若干異っている。必しも同一の「行為」がくり返されている訳ではないからである。しかしこれについては改めて考えることとしたい。

文 献

1. I. Yamaguchi, A Consideration on the Category of Transitivity in Russian. 『人文』 第20集 昭和49(1974)年。
2. 山口巖「準他動詞について」『ロシヤ語ロシヤ文学研究』第8号 昭和51(1976)年。
3. 山口巖「古代ロシア語における第二対格について」『人文』第23集 昭和52(1977)年。
4. 山口巖「存在文と非存在文について」未発表。
5. 山口巖「ロシア語における数のカテゴリーについて」『古代ロシア研究』第9号 1968年。
6. АН СССР, *Грамматика русского языка*, т.1, М. 1960.
7. その他参考にしたもの。A. Vaillant, *Grammaire comparée des langues slaves*, t. 1, Paris 1950; t. 3, 1966.

[補足]

「存在文と非存在文について」は、この時未発表であったが、「存在文と存在否定文について」として、『言語研究』第75号(昭和54年)に発表した。

またアカデミー文法の引用の箇所は次のような意味である。

「多回的亜体(多回体のこと)の動詞は一つの方向あるいは同じ方法、同一時にはなく、行われるところの行為を示す。これに対して非多回的亜体の動詞は一つの方向に、非断続的に、同一時点に行われる行為をあらわす。」